

誰がサブサハラ・アフリカを養っているのか？ ——その穀物輸入の過去・現在・未来——

妹尾 裕彦

千葉大学・教育学部

Who feeds Sub-Saharan Africa? The past, present and future of its cereal import

SEO, Yasuhiko

Faculty of Education, Chiba University, Japan

サブサハラ・アフリカ諸国の主な輸入穀物を把握した上で、この地域が、どの穀物をどこからどれだけ輸入しているのかについて、国連の貿易統計データベースを用いて時系列的に明らかにする。サブサハラ・アフリカ諸国による穀物の輸入量は、小麦と米がほぼ同程度に増加してきており、近年の主な穀物輸入相手国は、タイ、インド、ロシアと続いている。したがって、この地域の輸入穀物が米国や西欧からの小麦だとする見方は、正しくない。また、今後サブサハラ・アフリカ諸国で米の増産がさらに進めば、小麦の輸入量が米のそれを大きく凌駕していくはずであり、その時、この地域にとってはロシアがより重要な穀物輸入相手国となる可能性が高い。

キーワード：サブサハラ・アフリカ (Sub-Saharan Africa), 穀物 (cereal), 輸入 (import), 小麦 (wheat), 米 (rice)

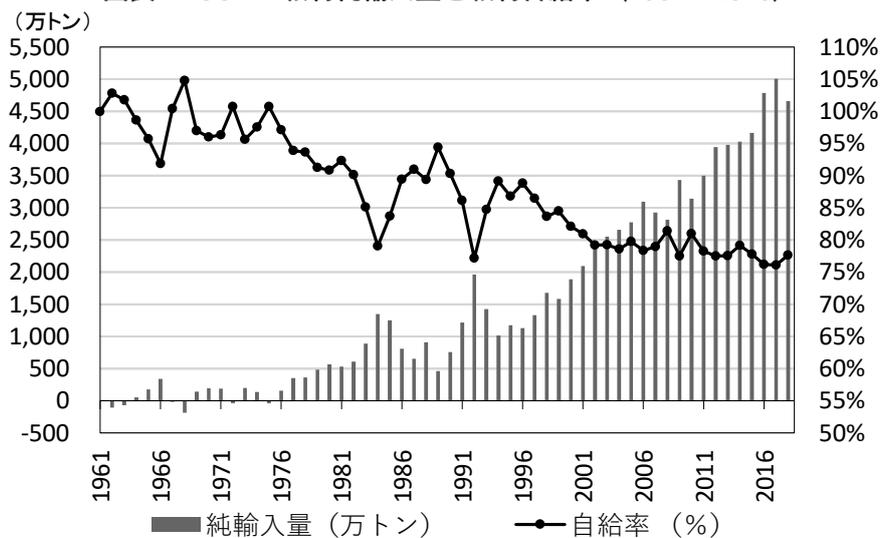
はじめに

サブサハラ・アフリカ (以下、SSAと略す) は、穀物の純輸入量を増やし続けている (図表1)。この量は、2001年に、初めて2000万トンを超えたとともに、1992年の大干ばつ時の過去最高記録 (1964万トン) を更新した

が、その後も増加を続けて2014年には4000万トンを突破し、2017年には史上最高の5008万トンに達した (FAO [2020])。そして、穀物自給率も2016年には76.2%まで落ち込んだ結果、ついに1992年の77.2%という過去最低記録を更新した (2017年は76.1%)¹⁾。

こうした穀物の純輸入量の増加とは、見方を変えれば、

図表1：SSAの穀物純輸入量と穀物自給率 (1961～2018)



(出所) FAO [2020] より筆者作成。

連絡先著者：妹尾 裕彦

<https://orcid.org/0000-0001-8249-8196>

この地域への穀物輸出を増やしている国々が世界のどこかにある、ということでもある。では、SSA 諸国は、いったい世界のどこからこれほどの穀物を輸入しているのか。換言すれば、誰がSSAを養っているのか。また、SSAでは主穀が5つもあるなど穀物生産構造が世界的に見て特殊な状況となっているが(妹尾 [2017] [2020])、そもそもどの穀物をどの程度輸入しているのか。さらに、このSSAの穀物輸入には、いかなる論理があるのか。逆に、SSAへの穀物輸出国は、どのような背景があってSSAに輸出しているのか。これらの問いに解を与えることで、SSAの穀物輸入をめぐる実像を示すことが、本稿の目的である。

以下、本論に入る前に、本稿での用語を定義しておく。まず、「小麦」の輸出入とは、小麦そのもの(これを「小麦本体」と記す)と「小麦粉」の輸出入を合わせたものである。その際、小麦粉については0.72を換算係数として、小麦本体に換算する(72トンの小麦粉が、100トンの小麦本体に相当する)。次に、「米」の輸出入とは、「粳米」、「玄米」、「精米」、「碎米」の輸出入を合わせたものである。その際、玄米については0.9を、精米・碎米については0.65を換算係数として、粳米に換算する。さらに、「メイズ」の輸出入とは、メイズそのもの(これを「メイズ本体」と記す)と、「メイズ粉」を合わせたものであり、メイズ粉については0.9を換算係数として、メイズ本体に換算する。

I. SSAにおける穀物の輸出入：貿易対象の穀物は何か

まず、図表2で、SSAにおける穀物の輸出入の状況について、SSAを地域別に分け、また穀物別にも分けて、年代別の合計値で見よう。次のことを確認できる。

第一に、現在、輸入量の最も多い穀物は、SSAでも地域ごとに異なる。まず東アフリカ(スーダンを含む)では、小麦が圧倒的に多い。ただし、米が2000年代には2位に再浮上したのみならず²⁾、2010年代には輸入穀物の中での重要度を高めてもいる。南部アフリカでは、1970~90年代にはメイズの輸入量が最多だったが、2000年代には米と小麦がほぼ同量となった後、2010年代には小麦が最多となり、これに米が続いている。中部アフリカでは、当初は小麦が群を抜いて多かったが、2000年代以降は米が小麦とほぼ肩を並べるようになってきている。そして西アフリカでは、1980年代以降は米が最多であり、これに小麦が続いている。またこの地域では、輸入量に占めるメイズの割合が他地域よりもかなり小さい。

なお、西アフリカでは、1990年代以降、輸入穀物の中で小麦と米の占める割合に変化はないが、東アフリカでは、21世紀に入って輸入穀物の中で小麦の占める割合が高まっており、約60%となっている。逆に、中部アフリカでは、21世紀に入って輸入穀物の中で米の占める割合が増えており、4割以上に達していることも、興味深い点である。

第二に、ミレットとその他については、どの地域でも輸出入はほとんど見られない。ソルガムも、東アフリカ以外では、近年の輸出入はほぼないに等しい。このよう

に輸出入とも僅少ということは、需給が概ね国内で完結していることを意味している。他方、メイズに関しては、特に南部・東アフリカで一定量の輸出入があり、SSAで最も輸出量の多い穀物でもある。つまりメイズに関しては、域内に一定の国際市場が存在すると考えられる(もちろん、その規模は、SSAでの生産量と比較すれば、わずかである)。

第三に、SSAの全地域で純輸入量が増加し続けているわけではなく、南部アフリカでは、2010年代の純輸入量が2000年代と比べてほぼ不変となっている(2010年代の値は、2018年分までであり、ここには2019年分は含まれていないことに注意)。南部アフリカでは、2000年代に大きく落ち込んでいた輸出量が、2010年代は2236万トンと大きく回復し、1970~80年代とほぼ遜色ない状況となっている。この輸出量の多くはメイズによるものであり、メイズに限れば、この地域の純輸入量はなおマイナス(つまり輸出超過)を維持している³⁾。

第四に、SSA全体の輸入量は、1961~2018年で10億4691万トンであるが、このうち小麦が4億5938万トン(43.9%)、米が4億3244万トン(41.3%)であるから、この両者がSSAの二大輸入穀物ということになる。なお、2000年代以降に限定すると、小麦が3億1195万トン(44.7%)、米が3億387万トン(43.5%)であるから、近年の両者の輸入量はほぼ同量と言ってよかろう。

II. 輸入相手国と輸入量をどのように把握するか

前節で、SSAにおける輸入穀物の大半が、小麦と米であることを確認した。では、SSA諸国は、これらをどこからどれだけ輸入しているのか。これは、実に単純な問いであるにもかかわらず、きわめて即答しにくい問いである。

そもそも、ある国がどの農産物をどこからどれだけ輸入しているのかは、どうすればわかるのか。管見の限り、用いることのできるデータベースは2つある。

一つは、国連食糧農業機関(FAO)のFAOSTAT(FAO [2020])である。FAOSTATの「Trade」配下の「Detailed trade matrix」のデータを参照すれば、ある国がどの農産物をどの国との間でどれだけ輸出入しているかを、量・金額ともに調べられる。なお、単にある国がどの農産物をどれだけ輸出入しているのかを調べるならば、「Trade」配下の「Crops and livestock products」のデータ(以下では、これを「FAOSTATの輸出入統計」と記す)が扱いやすいが、こちらでは貿易相手国がわからない。このため、貿易相手国を把握するには、「Detailed trade matrix」に頼らざるを得ない。

もう一つは、国連(UN)の「UN Comtrade Database」(UNSD [2020a])である。このデータベースで得られる二国間の貿易データには、その時期(月または年)、商品コード、輸出国、輸入国、貿易量、貿易金額などが記されている。ここから必要なデータを抽出して積み上げれば、ある国がどの農産物をどの国との間でどれだけ輸出入しているかを、量・金額ともに把握できる。

さて、この2つのデータベースではともに、輸入側から見ることも、輸出側から見ることもできる。これは、

図表2：SSAにおける穀物の輸出入の状況（1961～2018）

		1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代		1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代		
東アフリカ	① 輸入量	464	820	1,776	2,632	5,249	8,005	小麦	209	114	317	973	1,217	1,781	① 輸入量	南部アフリカ
		222	447	934	858	1,849	3,526	米	90	147	302	690	1,225	1,469		
		114	220	738	1,486	1,579	1,332	メイズ	138	163	735	1,081	912	1,048		
		10	4	0	2	16	23	ミレット	0	1	1	1	8	10		
		11	9	76	183	470	650	ソルガム	36	25	44	65	63	83		
		3	6	7	31	14	45	その他	9	12	16	70	127	64		
	824	1,506	3,532	5,191	9,177	13,581	合計	482	461	1,416	2,880	3,552	4,453			
	② 輸出货量	49	31	3	123	189	281	小麦	6	134	246	160	162	241	② 輸出货量	
		63	41	7	53	42	148	米	6	7	3	14	30	129		
		373	547	459	618	325	772	メイズ	1,344	2,165	2,097	1,438	1,001	1,850		
		11	12	3	39	5	15	ミレット	0	1	0	0	0	0		
		57	89	239	185	46	149	ソルガム	105	153	51	15	4	15		
		1	1	0	0	3	22	その他	8	23	18	22	1	1		
	553	720	712	1,018	610	1,387	合計	1,468	2,483	2,415	1,649	1,198	2,236			
	③ 純輸入量	416	790	1,774	2,509	5,060	7,724	小麦	203	-20	71	813	1,055	1,539	③ 純輸入量	
		159	406	927	804	1,807	3,378	米	85	140	300	676	1,194	1,340		
		-259	-327	278	869	1,254	560	メイズ	-1,206	-2,003	-1,361	-357	-89	-802		
		-1	-9	-3	-37	11	8	ミレット	0	0	1	1	8	9		
-46		-80	-163	-2	424	501	ソルガム	-69	-128	-8	50	59	68			
2		5	7	30	12	23	その他	1	-11	-2	48	126	62			
271	785	2,821	4,173	8,567	12,194	合計	-986	-2,021	-999	1,231	2,354	2,218				
西アフリカ	① 輸入量	368	1,140	1,801	2,356	4,826	7,081	小麦	144	349	569	710	1,284	1,753	① 輸入量	中部アフリカ
		493	1,098	2,774	3,834	7,655	11,693	米	54	124	292	496	1,248	1,724		
		34	169	282	189	305	481	メイズ	48	188	228	210	393	421		
		79	159	44	9	27	5	ミレット	1	4	1	0	2	0		
		16	85	138	38	22	22	ソルガム	0	7	38	7	24	43		
		1	1	9	5	12	4	その他	0	0	0	4	4	7		
	990	2,652	5,048	6,432	12,847	19,286	合計	248	672	1,128	1,428	2,955	3,947			
	② 輸出货量	22	15	9	53	78	150	小麦	0	1	4	23	12	13	② 輸出货量	
		7	12	4	16	142	425	米	3	4	7	1	2	10		
		1	4	21	23	45	65	メイズ	114	55	0	0	11	16		
		41	33	18	15	20	3	ミレット	39	0	0	0	1	0		
		0	1	7	8	5	6	ソルガム	0	0	0	0	0	0		
		0	0	0	0	2	0	その他	0	0	0	0	0	0		
	71	65	59	115	291	649	合計	156	60	11	24	25	39			
	③ 純輸入量	346	1,125	1,792	2,303	4,748	6,931	小麦	144	348	565	687	1,272	1,740	③ 純輸入量	
		486	1,086	2,769	3,819	7,513	11,268	米	51	120	285	495	1,246	1,714		
		33	166	261	166	260	416	メイズ	-67	133	228	210	382	405		
		38	126	26	-6	8	3	ミレット	-38	3	1	0	2	0		
16		84	131	31	17	15	ソルガム	0	7	38	7	24	42			
1		1	9	4	10	4	その他	0	0	0	4	4	7			
920	2,587	4,990	6,317	12,556	18,637	合計	91	612	1,117	1,404	2,930	3,908				

(注) 単位は、万トン。

(出所) FAO [2020] より筆者作成。

例えばケニアがどの国からどれだけの小麦を輸入しているのかを見ることもできるし、逆にどの国がケニアにどれだけの小麦を輸出しているのかを見ることもできるといことであり、要は2つのデータベースのそれぞれで、2通りの見方が存在するわけである。そこで、以下では、「Detailed trade matrix」を用いる方法を (A)、「UN Comtrade Database」を用いる方法を (B) として、こ

れらの優劣を考えよう。判断のポイントは、3つある (図表3)。

第一に、カバーしている期間の問題がある。まず (A) では、輸入側から見る場合と輸出側から見る場合ともに、1986年以降のデータを得られる。ただし、1990年代の前半または後半以降でないとデータを得られない、という国が相当数あるし、これ以後でも年によってはデータが

欠損しているという国も、少なくない。

他方、(B)では、UNSD [2020b]によると、最も早い国で1988年以降のデータを得られる⁴⁾。ただし、1980年代のデータを得られる国は世界で26カ国・地域と少なく、この中にSSA諸国は含まれていない。このため、輸入側から見る場合、SSA諸国では、1990年代の途中からデータを得られるという国が多く、2000年代以降でないデータを得られない国も少しある。また、データの得られる年以降でも、途中でデータが欠損することが少なからずある。これに対して輸出側から見る場合は、主な穀物輸出国であるパキスタンについては2003年以降の、またベトナムについても2000年以降のデータしか得られない。この両国が世界の主な穀物輸出国であることをふまえると、これら以前のデータを得られないことは、大きな弱点となる⁵⁾。

以上をまとめると、期間については、輸入側から見る場合には、(A)(B)の甲乙にはわかには断定しがたく、輸出側から見る場合には、(A)に分がある、ということになる。

第二に、カバーしている国数の問題がある。まず(A)では、輸入側から見る場合、SSAの49カ国中38カ国のデータしか得られない。これに対して、輸出側から見る場合は、SSAの49カ国すべてのデータを得られる。

他方、(B)では、輸入側から見る場合には、44カ国のデータを得られる状況であり、得られない5カ国とは南スーダン、コンゴ民主共和国、ソマリア、赤道ギニア、リベリアである。では、輸出側から見る場合はどうか。この場合については明示されていないので断言しづらいが、これら5カ国への穀物輸出量が計上されている事例があるので、SSAの49カ国すべてのデータを得られると考えて良さそうである。

以上をまとめると、国数については、輸入側から見る場合は、(B)に分があり、輸出側から見る場合は、(A)(B)ともに問題ない、と言えるだろう。

第三に、データの精度の問題がある。あらゆる貿易実態が正確にデータとして記録されているならば、特定の二国間の貿易量は、輸入側から見ても、輸出側から見ても、同量のはずである。ところが、(A)では、輸入側から見た合計値と輸出側から見た合計値とが大きく異なっている、という事例が数多くある。また、これらの値は本来、「FAOSTATの輸出入統計」で得られるある国の輸入量と同値となるべきだが、必ずしもそうっておらず、特に輸出側から見た合計値で、過少となる傾向が著しい。

他方、(B)でも、輸入側から見た合計値と輸出側から見た合計値は合致しないことが多い。ここで、もし途上国であるSSA諸国による報告データ(輸入側から見た合計値)よりも、先進国を含むSSA以外の諸国による報告データ(輸出側から見た合計値)のほうが正しい傾向があるのなら、輸出側から見た合計値を使えば良いが、必ずしもそうは言えないようである⁶⁾。

以上をまとめると、精度については、輸入側から見る場合は、(A)と(B)とで一概に優劣を判断できないが、輸出側から見る場合は、(A)は実用に適さない、となる。

図表3：データベースと見方の優劣比較

		①期間	②国数	③精度
(A)	輸入側から見る	○	△	○
	輸出側から見る	○	◎	×
(B)	輸入側から見る	○	○	○
	輸出側から見る	△	◎	○

(出所) 筆者作成。

こうした3つの判断ポイントをすべて勘案すると(図表3)、(B)の輸入側から見るのが最も欠点が少ない、ということになる。そこで本稿では、(B)の輸入側から、つまり「UN Comtrade Database」を用いて、SSA諸国が各農産物をどこからどれだけ輸入しているのかのデータを見ることで、SSA諸国の小麦と米の大量輸入の実態に迫りたい。

Ⅲ. SSA諸国による小麦と米の輸入相手国と輸入量およびその論理

(1) 「UN Comtrade Database」の特性とマトリックスの作成

とは言え、SSAの各国が、そしてその累計としてのSSA全体が、各穀物をどこからどれだけ輸入しているのかを、(B)の「UN Comtrade Database」で把握するのは、容易なことではない。というのも、(A)の「Detailed trade matrix」とは異なり、(B)では、二国間の貿易データから必要とするデータを抽出しそれを振り分けることで、まずマトリックスを自作しなくてはならないからである。

しかも、データは二国間の貿易実態を表すものだから、多国間で合算されたデータを直接得ることは、基本的にはできない(例外的に、EU-28とASEANについてのみ多国間で合算されたものを直接得られる)。つまり、SSA全体がアメリカからどれだけ的小麦を輸入しているか、といったデータを直接得ることはできない。こうしたデータを得ようとすれば、SSAの国毎にアメリカからどれだけ的小麦を輸入しているかのデータを得た上で、それらを合算するしかない。これはアメリカ以外の国でも同様であり、結局、輸入しているSSAの国毎に、かつ多岐にわたる輸入相手国ごとにデータを積み上げなければ、SSA全体がどこからどれだけ的小麦を輸入しているのかはわからない。さらに、データは年毎なので、これらの作業を行っても、1年分の実態しか掴めない。複数年にわたる実態を掴もうとすれば、同じ作業を複数回繰り返さなくてはならない。

困難は、これらだけにとどまらない。小麦の場合、小麦粉という形態での貿易もある。特にSSAでは、小麦本体よりも小麦粉での輸入量のほうが多い場合があるので、双方の輸入量を把握しなくては、およそ実態に迫れない。米の場合は、もっと複雑であり、精米・碎米での輸入が圧倒的に多いが、玄米や粳米での輸入も少しある。つまり、米の貿易については、粳米、玄米、精米、碎米の4種のデータがあり、これらをすべて数え上げなくては、正確な輸入量を把握できない。一口に小麦と米と

言っても、実際には小麦で2つ、米では4つの商品分類のデータを扱わなくてはならないのである⁷⁾。

以上をふまえれば、SSA諸国が、そしてその累計としてのSSA全体が、小麦や米を、世界のどこからどれだけ輸入しているのか、そしてその時系列的な推移がどうなっているのかを把握することが、いかに多大な労力を要するかがわかる。と同時に、この単純な問いの解明がなされてこなかった理由も、この多大な労力という点にあると考えられる。

そこで本稿では、データを得られるSSAの44カ国すべてを対象とはせず、輸入量の上位国に限定して分析する。下位国の輸入量は少ないので、これらを見捨ててもSSA全体としての大勢を把握する上では差し支えないからである。問題はその線引きだが、まず「FAOSTATの輸出入統計」を用いて、小麦と米のそれぞれで、SSA49カ国の1995～2018年の累計輸入量を求め、それを上から順に並べる。次に、この49カ国の中には、「UN Comtrade Database」ではデータを得られない5カ国が含まれているので、これらを除いた44カ国の中から、輸入量の上位22カ国を、本稿で取り扱う対象とする。「FAOSTATの輸出入統計」によれば、1995～2018年のSSA49カ国の累計輸入量は、小麦で3億5311万トン、米で3億3703万トンであるのに対して、この上位22カ国の同期間の累計輸入量は、小麦で3億818万トン、米で2億9678万トンであるから、SSAの小麦輸入の87.3%、米輸入の88.1%が、この上位22カ国によってなされていることになる。全体的な構造を掴むには、ひとまずこの

上位22カ国だけで差し支えないだろう。

なお、FAO [2020] では2018年までのデータしか得られないが、UNSD [2020a] では国にもよるが2019年までのデータを得られるので、以下では1995～2019年を分析対象期間とする。また、データが異様な値となっており、貿易実態を正しく反映しているかの疑義がある場合には、輸出側のデータを見た上で数値を補正したケースがある（この詳細については、補遺を参照のこと）。

(2) SSA諸国はどこから小麦を輸入しているのか（その1）：輸入相手国側を見る

では、SSA諸国の小麦の輸入マトリックスを分析しよう。マトリックスなので多様な図表（見方）を提示できるが、行論の都合上、まずSSAの輸入相手国側を見る。とは言え、SSAの小麦の輸入量上位22カ国は先に示しておくべきであり、それは上から順に、ナイジェリア、スーダン、南ア、エチオピア、ケニア、タンザニア、アンゴラ、コートジボワール、セネガル、モザンビーク、ガーナ、カメルーン、モーリタニア、ウガンダ、ジブチ、ジンバブエ、エリトリア、ギニア、コンゴ、モーリシャス、マリ、マダガスカルである⁸⁾。

図表4が、この22カ国への供給元である主な輸入相手国である。ここでは、SSAによる輸入量の多い上位20カ国を掲げ、また1995～2019年の25年間で5年毎に括弧で示した。さらに、20カ国の同期間の自給率も付した。輸入量上位22カ国の小麦の輸入量は、期間合計で2億3071万トンであり、このうち図表4の20カ国からで2億

図表4：SSAの小麦輸入量上位22カ国の小麦の輸入相手国とその輸入量（1995～2019）

	期間合計	①1995-99	②2000-04	③2005-09	④2010-14	⑤2015-19	自給率
総計	23,071	1,638	3,497	5,987	5,515	6,434	-
1 アメリカ	4,960	461	807	2,268	887	536	177%
2 フランス	3,488	406	635	801	1,019	628	191%
3 ロシア	2,955	0	43	261	620	2,032	130%
4 カナダ	1,833	128	307	414	429	556	318%
5 豪州	1,729	153	535	411	459	171	338%
6 アルゼンチン	1,509	91	323	560	281	254	286%
7 ドイツ	1,131	89	88	302	322	330	126%
8 ウクライナ	859	1	16	178	315	348	153%
9 トルコ	523	10	17	37	136	323	99%
10 ルーマニア	380	6	9	50	50	265	127%
11 イタリア	267	15	79	103	46	24	55%
12 インド	264	5	122	6	124	7	101%
13 ベルギー(*)	225	45	12	64	61	42	46%
14 ポーランド	204	3	17	24	17	144	105%
15 ブラジル	170	3	0	24	142	1	42%
16 イギリス	162	29	87	13	19	13	108%
17 リトアニア	156	0	1	7	25	124	203%
18 南ア	151	0	14	26	63	48	67%
19 ブルガリア	143	0	1	57	28	58	173%
20 ラトビア	133	0	0	3	30	100	231%

(*) データベースの特性上、ベルギーとルクセンブルグが区別されていない「ベルギー＝ルクセンブルグ」となっている時期については、このデータを充当した。該当期間は、輸入量に関しては1998年まで、自給率に関しては1999年までである。

(注) 輸入量の単位は、万トン。

(出所) UNSD [2020a], FAO [2020] より筆者作成。

1241万トンと大半を占めている。

この図表4は、SSA諸国の小麦の輸入相手国とその量を示しているに過ぎず、SSA諸国が輸入している小麦の生産国を示すものではない。とは言え、20カ国中15カ国は自給率が100%超であり、これらについては国内需要を超える生産＝供給力がSSAへの輸出に向けられていると見て、概ね差し支えなからう。他方で、自給率が100%未満の国も5カ国あり、トルコ、イタリア、ベルギー、ブラジル、南アがそれである。これらをどう考えたら良いだろうか。

まずトルコについては、523万トンの輸出量のうち、93.7%が小麦粉での輸出である。実はトルコは、世界最大の小麦粉輸出国なのだが（FAO [2020]）、これは、図表5からわかるように、小麦の自給率が100%近いにもかかわらず小麦本体を大量に輸入し、そのほぼ全量を製粉して輸出することで成り立っている⁹⁾。となれば、この小麦粉の元となる小麦本体の輸入相手国が、問題となる。

図表5から、トルコは2000年代後半から小麦粉の輸出を増やしていることがわかる。そこで、2005～2019年のトルコの小麦本体の輸入相手国とその量を見ると、累計輸入量が5254万トンであり、その内訳は、多い順にロシアが3027万トン（58%）、カザフスタンが484万トン（9%）、ウクライナが348万トン（7%）、リトアニアが225万トン（4%）となっている（UNSD [2020a]）。トルコから輸出される小麦粉となる小麦本体の産地の割合

が、必ずしもこの通りという保証はないが、図表4にあるトルコの小麦の輸出量（その93.7%は小麦粉）の相当部分は、元をたどれば旧ソ連産であり、それがトルコに運び込まれ製粉されたのちSSAに流れ込んでいる、と考えると良いように思われる（この点については、第IV節で再び言及する）。

ベルギーも、トルコと似ている面がある。輸出規模はトルコよりも小さいものの、小麦粉での輸出が84.8%を占めているからである。なお、ベルギーの小麦本体の輸入相手国は、フランスとドイツからが多く（それぞれ58%、25%）、これにカナダ、アメリカ、イギリスを加えた5カ国からで92%、オランダを加えた6カ国からで97%となっている。

他方で、イタリアとブラジルは、小麦本体での輸出が大半を占めており、南アもこれが約6割となっている。このうちイタリアと南アが低自給率にもかかわらず小麦を輸出している理由は、後に輸入国側から見際に明らかとなる。ブラジルは、輸出の大半が④期に集中しており、安定した供給元とはいいがたい¹⁰⁾。

さて、図表4の上位は、自給率100%超の国が大半であり、伝統的に小麦の生産・輸出量の多い国、つまりアメリカ、フランス、カナダ、豪州、アルゼンチンなどが並んでいる¹¹⁾。これは、ある意味では予想通りだろう。だが、特筆すべきは、近年になってSSAの輸入相手国の上位に、旧ソ連や東欧の国々が顔を出すようになったことであり、この変化を明確に示したのが図表6である。

図表5：トルコの小麦本体と小麦粉の輸出入量（1995～2018）

		1995-2018					
		1995-99	2000-04	2005-09	2010-14	2015-18	
小麦本体	輸入量	6,054	929	531	962	2,037	1,935
	輸出量	912	323	294	134	164	21
	純輸入量	5,142	606	237	828	1,873	1,914
小麦粉	輸入量	20	0	0	0	0	19
	輸出量	3,504	268	220	759	1,042	1,336
	純輸入量	-3,483	-268	-219	-759	-1,042	-1,317

(注) 単位は、万トン。

(出所) FAO [2020] より筆者作成。

図表6：SSAの小麦輸入量上位22カ国の小麦の輸入相手国地域とその輸入量（1995～2019）

	期間合計	①1995-99 ②2000-04 ③2005-09 ④2010-14 ⑤2015-19				
		北米(*1)	6,793	589	1,114	2,682
西欧(*2)	5,272	583	900	1,283	1,467	1,037
豪・アルゼンチン	3,239	244	859	971	740	425
旧ソ連(*3)	4,103	1	60	448	989	2,604
東欧・トルコ(*4)	1,249	18	44	167	231	789

(*1) 北米＝アメリカ、カナダ。(*2) 西欧＝フランス、ドイツ、イタリア、ベルギー（1998年まではベルギー＝ルクセンブルグ）、イギリス。(*3) 旧ソ連＝ロシア、ウクライナ、ラトビア、リトアニア。(*4) 東欧＝ポーランド、ルーマニア、ブルガリア。

(注) 単位は、万トン。

(出所) UNSD [2020a] より筆者作成。

図表6からは、近年、伝統的な生産・輸出大国からの輸入が漸減気味であるのに対して、旧ソ連や東欧・トルコからの輸入が激増していることがわかる。これらからの輸入量たるや、⑤期においては、北米、西欧、豪・アルゼンチンから輸入量の合計よりも多いほどだ。SSA諸国が、小麦の輸入（供給）を専ら欧米先進国（北米、西欧）に依存しているという図式は、実は昔の話であり、今日の実態はこの図式とは異なるのである。

では、旧ソ連や東欧の国々は、なぜSSAへの小麦輸出をこれほど大きく増やしているのだろうか。これを考える図表7は、SSAの主な小麦輸入相手国地域の生産動向を示したものである。煩雑を避けるため、図表4での①と⑤期のみ示し、この2期の変化を付した。生産面積と生産量は、各期間の平均値である。

図表7から、北米は単収を向上させているものの生産面積の減少が大きいので、生産量を減少させているとわかる。実はカナダは生産面積を減らしつつも生産量を増やしているのだが、アメリカで生産面積と生産量がともに大幅減となっているのが、この原因である¹²⁾。また、西欧、豪・アルゼンチンは、単収の向上で生産量を増やしているが、その増加量はさほど大きくはない。これらに対して、旧ソ連や東欧は、単収を急伸させて、大增産を成し遂げている。特に旧ソ連の増産が著しいが、いずれも人口減少国であり、これだけ増産すれば輸出を大幅に増やさざるを得なくなるのは当然であって、その一部がSSAに向けられているのである¹³⁾。

なお、⑤期の旧ソ連の単収を国別にみると、ロシアは2.7t/haと低いが、リトアニアは4.5t/ha、ラトビアは4.4t/haと比較的高く、これはポーランドの4.5t/ha、ルーマニアの4.4t/haと同程度である。このことは、2000年代以降、バルト海から南東欧にかけてのEU各国で、農業技術革新が同時並行的に進んできたことを示唆しており、

また西欧の単収水準に近づく長期的過程が進行しているとも見ることができよう。

(3) SSA諸国はどこから小麦を輸入しているのか（その2）：輸入国側から見る

次に、小麦を輸入しているSSAの国毎に、輸入実態を見よう。図表8がそれである。

図表8では、「FAOSTATの輸出入統計」で輸入量の多い国から順に掲げている。順位と輸入量が逆転している（輸入量の小さい国がより上位にある）のは、UNSD [2020a] では、データの欠損期間の長い国があるためである。特に、ジブチとエリトリアについてはデータを得られるのが1年のみであり（それぞれ2009年、2003年）、実態をほとんどつかめない。アンゴラについても、2006年以前と2008年のデータを得られない。こうした欠点はあるものの、以下を注目点として指摘しておきたい（丸囲み数字は、図表4での時期区分を指す）。

第一に、ナイジェリアは、アメリカからの輸入が圧倒的に多く、3251万トン（67.2%）をアメリカ一に頼っている。これをアメリカから見ると、SSA22カ国への輸出量の実に65.6%を、ナイジェリア一国に向けていることになる。第二に、スーダンは、⑤期でトルコからの輸入が2番目に多く、その大半が小麦粉での輸入である。第三に、南アは、アルゼンチンからの輸入が518万トン（18.8%）と最多で、これにロシアからの500万トン（18.2%）と、ドイツからの466万トン（17.0%）が続く。これをアルゼンチンから見ると、SSA22カ国への輸出量の34.3%を南ア一国に向けており、ドイツから見ると、SSA22カ国への輸出量の41.3%を南ア一国に向けていることになる。

第四に、エチオピアでは、アメリカからの輸入が772万トン（36.6%）と最多だが、これにルーマニアからの

図表7：SSAの小麦輸入量上位22カ国の主な輸入相手国地域の小麦の生産動向（1995～2018）

		①1995-99	⑤2015-18	⑤-①
北米(*1)	生産面積(万ha)	3,541	2,636	-905
	生産量(万t)	9,019	8,472	-547
	単収(t/ha)	2.5	3.2	0.7
西欧(*2)	生産面積(万ha)	1,226	1,243	17
	生産量(万t)	7,935	8,441	506
	単収(t/ha)	6.5	6.8	0.3
豪・アルゼンチン	生産面積(万ha)	1,662	1,677	15
	生産量(万t)	3,421	4,023	603
	単収(t/ha)	2.1	2.4	0.3
旧ソ連(*3)	生産面積(万ha)	2,792	3,458	665
	生産量(万t)	5,005	10,491	5,486
	単収(t/ha)	1.8	3.0	1.2
東欧(*4)	生産面積(万ha)	568	566	-3
	生産量(万t)	1,730	2,562	832
	単収(t/ha)	3.0	4.5	1.5

(*1) 北米=アメリカ、カナダ。(*2) 西欧=フランス、ドイツ、イタリア、ベルギー（1999年まではベルギー=ルクセンブルグ）、イギリス。(*3) 旧ソ連=ロシア、ウクライナ、ラトビア、リトアニア。(*4) 東欧=ポーランド、ルーマニア、ブルガリア。

(出所) FAO [2020] より筆者作成。

図表8：SSAの小麦輸入量上位22カ国ごとの小麦の輸入量と主な輸入相手国（1995～2019）

	主な輸入相手国											特記すべき4位の国 (国名の後の数値は輸入量、 括弧内は割合)	
	1位			2位			3位			割合			
	国	輸入量	割合	国	輸入量	割合	国	輸入量	割合				
総計		23071											
1 ナイジェリア	アメリカ	4960	21.5%	フランス	3488	15.1%	ロシア	2955	12.8%				
2 スーダン	アメリカ	3251	67.2%	ロシア	329	6.8%	カナダ	233	4.8%				アルゼンチン199 (4.1)
3 南ア	豪州	755	25.4%	ロシア	732	24.6%	カナダ	354	11.9%				トルコ187 (6.3)
4 エチオピア	アルゼンチン	518	18.8%	ロシア	500	18.2%	ドイツ	466	17.0%				
5 ケニア	アメリカ	772	36.6%	ルーマニア	228	10.8%	イタリア	226	10.7%				
6 タンザニア	ロシア	271	21.3%	アルゼンチン	262	20.6%	ウクライナ	185	14.6%				豪州116 (9.1)
7 アンゴラ	ロシア	306	23.5%	豪州	275	21.1%	アルゼンチン	156	11.9%				ポルトガル60 (9.5)
8 コートジボワール	フランス	193	30.8%	ベルギー	126	20.0%	トルコ	106	16.9%				
9 セネガル	フランス	830	82.4%	ドイツ	50	4.9%	ロシア	40	4.0%				
10 モザンビーク	フランス	615	65.8%	ロシア	130	13.9%	アルゼンチン	41	4.4%				
11 ガーナ	アメリカ	103	25.0%	アルゼンチン	56	13.7%	ドイツ	46	11.1%				
12 カメルーン	カナダ	584	56.0%	フランス	107	10.3%	ロシア	107	10.3%				
13 モーリタニア	フランス	495	61.5%	カナダ	156	19.4%	アメリカ	45	5.5%				
14 ウガンダ	フランス	342	60.6%	ロシア	58	10.2%	ウクライナ	36	6.3%				
15 ジブチ	ロシア	174	26.1%	ウクライナ	86	12.9%	アルゼンチン	74	11.1%				豪州64 (9.6)
16 ジンバブエ	ベルギー	0.5	79.6%	トルコ	0.1	14.1%	エジプト	0.03	5.1%				
17 エリトリア	南ア	132	36.2%	モザンビーク	42	11.6%	アルゼンチン	22	5.9%				
18 ギニア	アメリカ	9	27.5%	イタリア	5	14.4%	インド	5	14.1%				
19 コンゴ	フランス	94	45.9%	モロッコ	56	27.3%	トルコ	20	9.5%				
20 モーリシヤス	フランス	83	40.6%	ロシア	46	22.3%	オランダ	22	10.8%				
21 マリ	フランス	214	56.8%	豪州	132	35.1%	ドイツ	11	2.9%				
22 マダガスカル	フランス	149	66.5%	セネガル	14	6.0%	ロシア	10	4.4%				
	トルコ	91	25.4%	エジプト	85	23.9%	フランス	63	17.5%				モーリシヤス27 (7.6)

(注) 輸入量の単位は、万トン。
(出所) UNSD [2020a] より筆者作成。

228万トン(10.8%)と、イタリアからの226万トン(10.7%)が続くのが特徴である。これをルーマニアから見ると、SSA22カ国への輸出量の60.1%がエチオピア向けであり、イタリアから見ると、SSA22カ国への輸出量の84.7%がエチオピア向けである。第五に、ケニア、タンザニア、ウガンダでは、ロシアからの輸入が最多である。第六に、コートジボワール、セネガル、カメルーン、モーリタニア、ギニア、コンゴ、モーリシャス、マリはフランスからの輸入が最多で、うちギニアとコンゴを除く6カ国は、フランスからの輸入が半分以上を占めている。第七に、ガーナは、カナダからの輸入が過半を占めており、これをカナダから見ると、ガーナがSSA22カ国の中で最大の輸出先である(31.8%)。

第八に、ジンバブエは、2010年代に輸入量が激増しており、また最大の輸入相手国が南アの132万トン(36.2%)で、これにモザンビークが42万トン(11.6%)と、近隣国からの輸入が多いのが他国にない特徴である。なお、2010年代前半には、小麦本体とほぼ比肩しうる量の小麦粉を輸入している。第九に、アンゴラ、ジブチ、ギニア、マダガスカルでは、小麦本体よりも小麦粉での輸入のほうが多い。アンゴラでは小麦粉での輸入が大半であり、当然、⑤期ではトルコからの輸入が最大である。ギニアも輸入量の2/3弱が、マダガスカルは輸入量の3/4以上が、小麦粉での輸入である。マダガスカルは、最大輸入相手のトルコ、2番目のエジプト、4番目のモーリシャスからは、ほぼ全量が小麦粉での輸入である。

以上から、次のように定式化できるだろう。

第一に、SSA諸国は、図表4に掲げたSSAの主な輸入相手国からバランスよく輸入しているのではなく、少数の特定国に強く依存することが多い。また、依存する相手国を決める最大の要因は地理(距離の近さ)であり、これに加えて、かつての支配関係(旧宗主国)や、文化的・人的つながり(言語など)も影響している。

実際に、西アフリカの場合、北米や西欧への依存傾向が強い。その上で、英語圏のナイジェリアはアメリカへの、ガーナはカナダへの依存が顕著であるのに対して、仏語圏のコートジボワール、セネガル、カメルーン、モーリタニア、ギニア、コンゴ、マリは旧宗主国のフランスからの輸入が圧倒的に多い。また、西アフリカでは、旧ソ連の国々の存在感は比較的小さめであり、豪州の存在感は極めて小さい。

これに対して東アフリカでは、旧ソ連の国々や、豪・アルゼンチンへの依存傾向が強く、スーダン、ケニア、タンザニア、ウガンダでこのことが典型的に表れているほか、モザンビーク、モーリシャスでも、こうした傾向が垣間見える。特に直近になるにつれて、旧ソ連の国々からの輸入が多くなっている。そして、北米や西欧の存在感が比較的小さい。やや例外的なのはモーリシャスで、フランスからの輸入量が最大だが、同国はフランスとの関係の強い国である。

なお、エチオピアとエリトリアでイタリアやルーマニアからの輸入が多く、南アでアルゼンチンやドイツからの輸入が多いのも、地理(距離の近さ)、かつての支配関係、文化的・人的つながりで説明できる。

輸入相手国を決める最大の要因が地理(距離の近さ)

だというのは、距離の近さで輸送コストを抑えられるからだだろう。また、かつての支配関係や、文化的・人的つながりも、契約・調達コストを低減するように作用しているものと考えられる。

第二に、小麦粉での輸入が多い国や、多くなった時期がある国には、相応の理由があり、またトルコに依存しやすい。アンゴラは長らく内戦が続いた国であり、石油輸出の急増もあってか小麦の需要が増えつつも、製粉工場の新設・増強が需要に追いついていないと思われる。ジンバブエの場合は、政治経済的な混乱が悪化した2000年代後半～2010年代前半に、小麦粉での輸入の割合が高くなった。ギニアはSSAの中でも相対的に貧しく、ジブチは小国であることから、製粉能力を十分に高められていないと思われる。

(4) SSA諸国はどこから米を輸入しているのか(その1): 輸入相手国側を見る

次に、米の輸入マトリックスの分析に移ろう。小麦と同様に、まず輸入相手国側を見るが、SSAの米の輸入量上位22カ国を予め示すと、上から順に、ナイジェリア、コートジボワール、セネガル、南ア、ベナン、ガーナ、カメルーン、ギニア、モザンビーク、ケニア、ブルキナファソ、アンゴラ、ニジェール、マダガスカル、シエラレオネ、マリ、ガンビア、タンザニア、モーリタニア、トーゴ、エチオピア、ウガンダである¹⁴⁾。

図表9が、この22カ国への供給元である主な輸入相手国である。形式は図表4と同様だが、米は国際市場が薄いこともあり、掲げる輸入相手国は18カ国にとどめた。輸入量上位22カ国の米の輸入量は、期間合計で2億3802万トンであり、このうち図表9の18カ国からで2億2974万トンとなっている。ちなみに、図表4で見たように、小麦の輸入量は期間合計で2億3071万トンであったから、小麦の輸入量よりも米の輸入量のほうが、わずかながらも多いことがわかる。

図表9も、SSA諸国の米の輸入相手国とその量を示しているに過ぎず、その輸入している米の生産国を示すものではない。しかし、上位国は自給率が高く、米の生産・輸出大国であるから、高い生産=供給力がSSAへの輸出にも向けられていると見て間違いはない。他方で、自給率0%の国が5カ国ある。UAE、スイス、シンガポール、イギリス、ベルギーがそれである。

これらの国々をどう考えたら良いのだろうか。もしも、欧州3カ国(スイス、イギリス、ベルギー)からの輸入が援助物資であるならば、米をよく食する西アフリカとの関係が欧州で最も強固なフランスも、この図表9にランクインしてきておかしくないはずだが、それが見えない。

そこで、この5カ国からの輸入量を欧州とアジアに括ったのが図表10だが、欧州3カ国からの輸入が2010年代に入って急減し、代わりにUAE・シンガポールからの輸入が増えているとわかる。このことから、かつては欧州3カ国がSSAの米の輸入の一部を仲介する役割を果たしていたが、この役割は主産地に近いUAE・シンガポールに取って代わられたのではないかと考えられる。欧州3カ国とUAEは、ともにインドやパキスタンからの輸入が多いことも、この傍証となろう。

図表9：SSAの米輸入量上位22カ国の米の輸入相手国とその輸入量（1995～2019）

	期間合計	①1995-99	②2000-04	③2005-09	④2010-14	⑤2015-19	自給率
総計	23,802	1,811	4,188	5,205	6,251	6,348	-
1 タイ	8,256	415	1,528	2,109	2,070	2,134	175%
2 インド	5,224	352	787	726	1,412	1,946	107%
3 ベトナム	2,799	427	322	594	743	714	125%
4 パキスタン	2,409	265	247	599	680	617	206%
5 中国	1,139	98	502	152	154	232	100%
6 ブラジル	789	6	4	228	384	166	96%
7 アメリカ	664	49	199	213	154	48	171%
8 ミャンマー	475	10	59	63	192	151	104%
9 UAE	355	14	11	92	100	139	0%
10 ウルグアイ	153	17	21	43	43	30	1502%
11 日本	116	17	28	23	34	12	93%
12 スイス	112	3	22	62	24	1	0%
13 シンガポール	110	8	30	14	39	18	0%
14 イギリス	96	26	53	15	1	1	0%
15 エジプト	88	5	31	43	8	0	111%
16 アルゼンチン	82	8	1	24	37	12	212%
17 タンザニア	59	6	1	8	18	26	93%
18 ベルギー(*)	48	1	13	33	1	0	0%

(*) データベースの特性上、ベルギーとルクセンブルグが区別されていない「ベルギー＝ルクセンブルグ」となっている時期については、このデータを充当した。該当期間は、輸入量に関しては1998年まで、自給率に関しては1999年までである。

(注) 輸入量の単位は、万トン。

(出所) UNSD [2020a], FAO [2020] より筆者作成。

図表10：自給率0%の5カ国からのSSAの米の輸入量（1995～2019）

	期間合計	①1995-99	②2000-04	③2005-09	④2010-14	⑤2015-19
スイス・英・ベルギー	257	31	88	111	25	2
UAE・シンガポール	465	22	41	106	139	157

(注) 単位は、万トン。

(出所) UNSD [2020a] より筆者作成。

さて、米の場合、意味ある量を供給している国は、小麦と比べて少ない。中で注目すべきは、米の大輸入国である中国¹⁵⁾がここで5位に食い込んでいるのもさることながら¹⁶⁾、近年、インドがSSAへの供給量を急増させていることであり、インドは既に年によってはSSAにとって最大の米の輸入相手国となっている（1995～96年、2003年、2012～13年、2015年、2018年）。また、自給率0%のUAEの米の輸入相手国を見ると、タイやベトナムからの輸入は少なく、インドとパキスタン、特にインドからの輸入が圧倒的に多いので、SSAがUAEから輸入している米の相当割合がインド産ではないかと見られる。

では、なぜインドは、SSAへの米の輸出を大きく増やしているのか。図表11は、SSAが輸入を増やしている国々の生産動向を見たものだが（生産面積と生産量は各期間の平均値）、どの国でも単収は多かれ少なかれ伸びているが、インドは生産面積が桁外れに大きいために、

単収向上による増産量が抜群に大きいことがわかる。

さらに、各輸出国によって、得意とする市場が異なることにも留意すべきである。図表12は、近年の世界の米輸入上位国のうちSSA諸国を除いた上位5カ国¹⁷⁾が、図表11の6カ国からどれだけ米を輸入しているかを示したものである。ここから、この図表11の6カ国で増産量がインドに次ぐベトナムの場合、主に近隣の東・東南アジアへの輸出を得意としているのに対して、インドの場合は、東・東南アジア市場を攻略できておらず、特に対立しがちな中国には、まったく入りこめていないことがわかる。端的に言って、インドの場合、増産分を東方ではなく中東やSSAなどの西方に向けざるを得ないのである¹⁸⁾。逆にベトナムの場合、図表9にあるように①期にはSSAへの大供給国であったにもかかわらず、その後の増産規模の割にはそれをSSAに向けていない、ということになる。

図表11：SSAの米輸入量上位22カ国の主な輸入相手国の米の生産動向（1995～2018）

		①1995-99	⑤2015-18	⑤-①
ブラジル	生産面積（万ha）	351	199	-153
	生産量（万t）	953	1,178	225
	単収（t/ha）	2.7	5.9	3.2
インド	生産面積（万ha）	4,393	4,372	-21
	生産量（万t）	12,504	16,533	4,029
	単収（t/ha）	2.8	3.8	0.9
ミャンマー	生産面積（万ha）	578	674	96
	生産量（万t）	1,768	2,573	805
	単収（t/ha）	3.1	3.8	0.8
パキスタン	生産面積（万ha）	233	279	46
	生産量（万t）	673	1,061	388
	単収（t/ha）	2.9	3.8	0.9
タイ	生産面積（万ha）	955	983	28
	生産量（万t）	2,302	2,947	645
	単収（t/ha）	2.4	3.0	0.6
ベトナム	生産面積（万ha）	717	771	54
	生産量（万t）	2,794	4,375	1,582
	単収（t/ha）	3.9	5.7	1.8

（出所）FAO [2020] より筆者作成。

図表12：世界の米輸入量上位5カ国（SSAを除く）の輸入マトリックス（2010～18）

		輸入国					5カ国合計
		中国	インドネシア	フィリピン	イラン	サウジアラビア	
輸出国	タイ	841	556	487	37	116	2,038
	ベトナム	1,715	872	1,310	0	13	3,910
	ミャンマー	33	49	51	0	0	133
	インド	0	139	36	658	1,265	2,099
	パキスタン	432	181	74	218	181	1,087
	ブラジル	0	0	0	0	7	7

（注）単位は、万トン。

（出所）UNSD [2020a] より筆者作成。

(5) SSA諸国はどこから米を輸入しているのか（その2）：
輸入国側から見る

次に、米を輸入しているSSAの国毎に、輸入実態を見よう。図表13がそれである。

図表13も、図表8と同じく、「FAOSTATの輸出入統計」で輸入量の多い国から順に示した。順位と輸入量が逆転している国のうち、モザンビーク、アンゴラ、シエラレオネは、内戦によりデータの欠損期間が長いことが影響している。より要注意なのはナイジェリアで、同国の米の輸入は、統計上、2010年代後半以降に激減した。この原因は、直接的には、同国が2015年に米の輸入決済用の外貨の調達を禁止したことにあるが、この時期からベナンやトーゴ、特に前者での米の輸入が急増しており、この両国に荷揚げされた米がナイジェリアに陸路で密輸されていると見られていることを、忘れてはならない（西澤 [2019], 妹尾 [2020: 309-310, 313]）。以上をふまえた上で、次の点を指摘しておきたい。

第一に、小麦とは異なり、輸入国によって輸入相手国が大きく異なるということが、あまり見られない。これは、米の場合、まとまった量を輸出できる国に限られているためであり、また輸入量の多い国ほど、2000年代前半から一早くSSAへの供給量を増やしたタイ——SSAへの最大供給国——に大きく依存せざるを得ないためだろう。実際、輸入量の上位国ほど、輸入相手国の1位はタイ、2位はインドかパキスタン、という構図になりやすく、全体では10カ国がこのパターンである。タイとインドは、幾つかの国を除くと、大抵は上位に食い込んでいる。

第二に、ベトナムは、SSA諸国による輸入量の多さの割に、上位に顔を出すことが少ない。これは、同国が、ガーナ（856万トン）、コートジボワール（752万トン）、セネガル（340万トン）の3カ国に集中的に輸出しているためであり、ベトナムのSSA22カ国への輸出量のうち実に70%がこの上位3カ国に向けられている。SSA

図表13：SSAの米輸入量上位22カ国ごとの米の輸入量と主な輸入相手国（1995～2019）

	期間合計輸入量	主な輸入相手国												特記すべき4位の国 (国名の後の数値は輸入量、 括弧内は割合)
		1位			2位			3位						
		国	輸入量	割合	国	輸入量	割合	国	輸入量	割合				
総計	23,802	タイ	8,256	34.7%	インド	5,224	21.9%	ベトナム	2,799	11.8%				
1 ナイジェリア	2,119	タイ	870	41.1%	インド	518	24.5%	ブラジル	255	12.0%	アメリカ112 (5.3)			
2 コートジボワール	3,247	タイ	1,023	31.5%	ベトナム	752	23.2%	インド	540	16.6%				
3 セネガル	3,223	タイ	1,213	37.6%	インド	1,014	31.5%	ベトナム	340	10.6%	ブラジル237 (7.4)			
4 南ア	2,628	タイ	1,627	61.9%	インド	626	23.8%	中国	132	5.0%				
5 ベナン	2,085	タイ	873	41.8%	インド	637	30.6%	UAE	188	9.0%				
6 ガーナ	1,879	ベトナム	856	45.5%	タイ	505	26.9%	アメリカ	229	12.2%				
7 カメルーン	1,372	タイ	648	47.3%	インド	196	14.3%	ベトナム	171	12.5%				
8 ギニア	767	インド	249	32.4%	パキスタン	120	15.7%	中国	115	15.0%				
9 モザンビーク	600	タイ	222	37.0%	パキスタン	120	20.0%	インド	115	19.2%				
10 ケニア	654	パキスタン	425	65.1%	タイ	61	9.4%	ベトナム	48	7.3%				
11 プルキナファン	951	タイ	293	30.9%	インド	207	21.8%	パキスタン	99	10.4%				
12 アンゴラ	334	タイ	169	50.5%	ベトナム	81	24.3%	ブラジル	28	8.3%				
13 ニジェール	677	タイ	210	31.1%	パキスタン	175	25.9%	インド	129	19.1%				
14 マダガスカル	789	パキスタン	352	44.6%	インド	219	27.8%	ミャンマー	60	7.6%	中国56 (7.1)			
15 シエラレオネ	145	パキスタン	32	22.0%	インド	22	15.2%	中国	19	12.7%	ブラジル16 (10.8)			
16 マリ	467	インド	142	30.4%	タイ	86	18.5%	パキスタン	60	12.9%				
17 ガンビア	402	ブラジル	86	21.3%	インド	59	14.8%	パキスタン	54	13.4%				
18 タンザニア	275	ベトナム	78	28.2%	パキスタン	57	20.8%	日本	25	9.1%	中国23 (8.2)			
19 モーリタニア	197	タイ	110	55.8%	パキスタン	32	16.0%	ブラジル	15	7.7%				
20 トーゴ	328	タイ	121	37.0%	インド	83	25.2%	パキスタン	41	12.6%				
21 エチオピア	366	インド	301	82.2%	パキスタン	32	8.9%	タイ	11	3.1%				
22 ウガンダ	296	パキスタン	153	51.8%	タンザニア	52	17.7%	ベトナム	49	16.7%				

(注) 輸入量の単位は、万トン。
(出所) UNSD [2020a] より筆者作成。

への主要供給4カ国（タイ、インド、ベトナム、パキスタン）で、これほど輸出先を特化させている国は他にない（タイ、インド、パキスタンの場合は、輸出先上位3カ国への輸出割合は5割未満）。他方で、ベトナムは、シエラレオネに0.1万トン、エチオピアに1万トン、モーリタニアに4万トン、ナイジェリアに7万トンなど、ほとんど入りこめていない国が多い。これは、主要供給4カ国の中で、東・東南アジアへの輸出が最多なのがベトナムであることの裏返しであり（図表12）、同国はSSAへのマーケティングを今やあまり重視していない、と見ることもできよう。

第三に、ケニア、タンザニア、ウガンダでは、インドからの輸入量が異様に少ない。この3国では、インドからの輸入は2.4～5.1%しかなく、いずれもパキスタンに頼る傾向が顕著である。パキスタンにとって、ケニアはSSA22カ国で最大の輸出先であり、ウガンダも4番目に多い輸出先である。東アフリカでインド系が果たしてきた経済的役割を考えると、インドからの輸入量の少なさは奇妙に思えるが、インド系の存在で生じた問題という歴史的経緯ゆえに、インドからの輸入を避けがちなのかもしれない¹⁹⁾。逆に、輸入相手が「インド一辺倒」なエチオピアは、かねてからインドとの友好関係がある²⁰⁾。

第四に、西アフリカでは、米国やブラジルからの輸入量に、一定の存在感がある。この2国からの供給が一定の割合を占めているのは、ナイジェリア、セネガル、ガーナ、アンゴラ、シエラレオネ、ガンビア、モーリタニアとすべて大西洋岸の国であり、東アフリカではこの傾向はみられない。なお、ブラジルから見ると、主な輸出先は順にナイジェリア、セネガル、ガンビア、ベナンである。またアメリカから見ると、主な輸出先は順にガーナ、ナイジェリア、コートジボワール、セネガルであり、特に前二者への輸出が、SSA22カ国への輸出の過半を占めている。

以上から、米の場合、小麦とは異なって北米、南米、西欧から輸入できる量が限定的なので、大西洋岸諸国でもアジアからの輸入にかなり頼らざるを得ないことが大前提としてあるが、その上で、輸入相手国を左右する要因として、まず地理（距離の近さ）、次いで文化的・人的つながり（言語など）が働いていると見なせる。ベトナムがSSAへの主要供給4カ国の中で販路を極度に限定しているのも、地理が影響しているとも見られるかもしれない。

さらに、小麦の場合とは異なり、かつての支配関係（旧宗主国）ではなく歴史的経緯が、輸入相手国を決める上で影響しているように見える。上記のほか、ギニアやタンザニアで中国からの輸入量の割合が比較的高いことも、この論拠である²¹⁾。

IV. 誰がSSAを養っているのか？：小麦と米を総合する

(1) SSAの穀物輸入の構図

最後に、SSA諸国の穀物（小麦と米）の輸入動向をトータルに見ることで、この地域が総体として、どの国からの供給に、どの程度頼っているのかを、明らかにしよう。

SSA諸国によるこの2つの穀物の輸入量を合算した結果が、図表14であり、1995～2019年の期間合計で多い順に並べた²²⁾。繰り返しになるが、これはあくまでも輸入相手国とその量のランキングであって、その穀物の生産国を直接示しているものではない。とはいえ、特に上位国については、概ね生産国を反映しているとも考えられる。したがって、厳密な意味ではないにせよ、SSAがどの国の生産力にどの程度頼っているのか、つまり誰がSSAを養っているのかを示すものであり、画期的な図表のはずである。

この図表14から、次のことがわかる。第一に、製粉・精米前の生産力ベースで見た場合、1995～2019年に最も多くの穀物（小麦と米）をSSAに供給した国は、一般的な通念とは異なって、アメリカではなくタイである。

図表14：SSAの小麦・米輸入量上位22カ国の穀物の輸入相手国と輸入量（1995～2019）

	期間合計	1995-99	2000-09	2010-19
		総計	46,873	3,448
1 タイ	8,262	415	3,641	4,206
2 アメリカ	5,624	510	3,488	1,625
3 インド	5,488	357	1,642	3,489
4 フランス	3,529	410	1,466	1,652
5 ロシア	2,957	0	305	2,652
6 ベトナム	2,799	427	916	1,457
7 パキスタン	2,512	265	922	1,325
8 カナダ	1,834	128	721	985
9 豪州	1,749	156	959	634
10 アルゼンチン	1,591	99	908	584
11 中国	1,213	99	685	430
12 ドイツ	1,162	90	420	652
13 ブラジル	958	9	257	693
14 ウクライナ	860	2	195	663
15 トルコ	540	10	57	474
16 UAE	478	27	151	300
17 ミャンマー	475	10	122	343
18 ルーマニア	380	6	59	315
19 イタリア	287	20	190	77
20 ベルギー(*)	273	46	122	105
21 イギリス	243	55	153	34
22 ウルグアイ	225	18	78	128
23 スイス	218	17	137	64
24 ポーランド	204	3	41	161
25 南ア	163	0	50	113
26 リトアニア	156	0	8	149
27 ブルガリア	144	0	59	85
28 オランダ	141	28	63	50
29 ラトビア	133	0	3	130
30 シンガポール	130	8	57	64
31 日本	129	21	61	47
32 エジプト	126	7	83	36

(*) データベースの特性上、ベルギーとルクセンブルグが区別されていない「ベルギー＝ルクセンブルグ」となっている時期については、このデータを充当した。該当期間は1998年までである。

(注) 単位は、万トン。

(出所) UNSD [2020a] より筆者作成。

タイは、1990年代後半には、SSAの穀物輸入相手国としてはアメリカとベトナムに次ぐ地位にとどまっていたが、2000年代にはアメリカを抜き、以後も首位に立っている。第二に、2010年代に限定すると、穀物輸入量は多い順に、タイ、インド、ロシアと続いており、かつて首位だったアメリカは上位3カ国にも入っていない。これは、インドやロシアが穀物生産量を増加させたためでもあるが、アメリカが小麦の生産量を大きく減らしたためでもある。

では、SSAへの穀物供給でタイやインドの貢献が大きい中で、このSSAの穀物輸入量のうち、アジアからの割合は過半を占めているのだろうか。また、SSAの穀物輸入量は、先進国と途上国のどちらからが多いのだろうか。以下では、この2つのことを考えよう。

図表15は、2つの穀物の輸入相手国と輸入量を地域別に括ったものである。その量は期間合計で4億6873万トンだが(系列1)、これにはSSA域内からの輸入量が少し含まれているので(系列2)、これを除くと4億6236万トンとなる(系列3)。そして、この内訳として、「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」(系列4)、「アジア(トルコを除く)」(系列5)、「トルコ」(系列6)、「その他(中米、北アフリカ等)」(系列7)の4つに分けて示した。トルコをアジアに含めず独立させたのは、第Ⅲ節で見たように、トルコからの穀物輸入は、元をたどればアジアからの供給とは必ずしも言えそうにないからである(トルコからの穀物輸入量540万トンのうち、523万トンが小麦であり、うち490万トンが小麦粉である。つまり、同国からの穀物輸入量の90.7%が小麦粉だが、その元とな

る小麦本体は、旧ソ連をはじめとする世界各地から輸入されている)。

この図表15を見ると、「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」も、「アジア(トルコを除く)」も、49.8%対47.4%でともに過半に達していないことがわかる。また、期間別に見ても、2000年代こそ「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」が過半となっているものの、1995～1999年では48.9%対49.4%、2010～19年では47.8%対48.7%と、いずれも5割を超えられていない。双方の雌雄が決しない理由は、ごくわずかな「トルコ」と「その他(中米、北アフリカ等)」が存在するためである。

そこで、トルコの小麦粉輸出の元となる小麦本体の輸入元の地域別の割合から推計すると、期間合計のトルコからの穀物輸入量540万トンのうち419万トンが、「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」で生産された小麦本体に由来すると捉えうる。したがって、これを「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」に加えると2億3461万トンとなり、率では50.7%と過半を占めることになる。とは言え、大まかに言えば、これまでのところ、「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」と「アジア(トルコを除く)」は、SSAへの穀物供給でほぼ同程度の役割を果たしてきた、ということになる。

次に、SSAの穀物輸入量は、先進国と途上国のどちらからが多いのだろうか。まず、図表15に示した「南米・豪州」のうち、豪州を除いた「南米」からの輸入量は、途上国からの輸入分と見なせる。他方で、「東アジア」のうち、「日本」からの輸入量は、先進国からの輸入分である。そこで、「アジア(トルコを除く)」からの輸入

図表15：SSAの小麦・米輸入量上位22カ国の穀物の輸入相手国地域と輸入量（1995～2019）

	期間合計		1995-99		2000-09		2010-19	
	輸入量	割合	輸入量	割合	輸入量	割合	輸入量	割合
1 総計 (=2+3)	46,873	-	3,448	-	18,877	-	24,548	-
2 SSA	637	-	45	-	255	-	337	-
3 SSAを除いた世界 (=4+5+6+7)	46,236	100.0%	3,403	100.0%	18,622	100.0%	24,211	100.0%
4 北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連	23,042	49.8%	1,666	48.9%	9,794	52.6%	11,582	47.8%
北米 (*1)	7,458	16.1%	638	18.8%	4,209	22.6%	2,610	10.8%
南米・豪州 (*2)	4,524	9.8%	282	8.3%	2,203	11.8%	2,039	8.4%
西欧 (*3)	5,711	12.4%	638	18.8%	2,489	13.4%	2,584	10.7%
旧ソ連・東欧 (*4)	4,834	10.5%	11	0.3%	669	3.6%	4,154	17.2%
上記以外	515	1.1%	96	2.8%	224	1.2%	194	0.8%
5 アジア(トルコを除く)	21,935	47.4%	1,680	49.4%	8,470	45.5%	11,786	48.7%
南アジア (*5)	8,478	18.3%	649	19.1%	2,715	14.6%	5,114	21.1%
東南アジア (*6)	11,666	25.2%	860	25.3%	4,737	25.4%	6,070	25.1%
東アジア (*7)	1,342	2.9%	119	3.5%	746	4.0%	477	2.0%
上記以外	448	1.0%	51	1.5%	272	1.5%	125	0.5%
6 トルコ	540	1.2%	10	0.3%	57	0.3%	474	2.0%
7 その他(中米、北アフリカ等)	719	1.6%	48	1.4%	301	1.6%	369	1.5%

(*1) 北米=アメリカ、カナダ。(*2) 南米・豪州=アルゼンチン、ブラジル、ウルグアイ、豪州。(*3) 西欧=ベルギー(1998年まではベルギー=ルクセンブルグ)、フランス、ドイツ、イタリア、スイス、イギリス。(*4) 旧ソ連・東欧=ロシア、ウクライナ、ラトビア、リトアニア、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア。(*5) 南アジア=インド、パキスタン、UAE。(*6) 東南アジア=タイ、ベトナム、ミャンマー、シンガポール。(*7) 東アジア=中国、日本。

(注) 輸入量の単位は、万トン。

(出所) UNSD [2020a] より筆者作成。

量に、「南米」からの輸入量を加え、「日本」からの輸入量を差し引くと、途上国からの輸入量を算出できる（他にも、途上国からの輸入量と見なしうるものはあるが、それらはここではひとまず含めない²³⁾。その量は、期間合計で2億4581万トンであり、率では52.4%である。また、期間別に見ても、1995～1999年で1785万トン（51.8%）、2000～2009年で9652万トン（51.1%）、2010～19年で1億3144万トン（53.5%）となっており、途上国からの輸入量は常に5割を超えている。つまり、少なくとも本稿で扱っているデータの期間で見ると、SSAという途上国地域が穀物を輸入している主な相手国地域は、一般的な通念とは逆に、先進国というよりもむしろ途上国なのである。

(2) SSAの穀物輸入の評価と展望

それでは、SSAの穀物輸入をめぐるこうした現状を、どう評価すべきだろうか。また、SSAの穀物輸入は、今後どのように展開していくのだろうか。さらに、SSAへの穀物供給をめぐる「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」と「アジア（トルコを除く）」の役割の拮抗は、今後どうなるのだろうか。あるいは、SSAにとって、穀物の主な輸入相手国地域は、今後も途上国であり続けるのだろうか。

SSAでは、小麦の生産量は全穀物生産量の5%と、きわめて少ない（妹尾 [2020: 302]）。これは、気候的条件ゆえ産地が限られているためである。したがって、小麦の輸入増大は致し方ない面があり、この小麦の輸入は今後も膨らみ続ける可能性が極めて高い。

問題は米である。SSAでは近年、米の大増産が進んでおり、その生産量は1962年の341万トンから2016年には2958万トンとなり、全穀物生産量に占める割合もこの間に倍以上となって19%に達した（妹尾 [2020: 302]）。これほどの増産があっても、SSAがなお大量の米を主にアジアから輸入していることについては、2つの評価がありうる。

第一は、アジアがSSAよりも早く向上させた米の生産＝供給力——緑の革命の成果——が、いまやアジアのみならずSSAの人々の生存と生活をも支えている、というものであり、これは事実としてはその通りである。

第二は、アジアから安価な米が大量に入ってくることで、SSAでの米の増産が妨げられていないか、というものである。第Ⅲ節で、ナイジェリアが米の輸入決済用の外貨の調達を禁止した結果、同国の米の輸入量が激減したと述べたが、この禁止は実はナイジェリアのコメの増産促進を目的としていた（西澤 [2019]）。また、この事実上の禁輸措置を回避するために、ベナンを経由した密輸入が続いていたが、ナイジェリアは2019年8月20日、陸路国境を一部封鎖してベナンとの陸路貿易を遮断することで、こうした密輸入の阻止にも乗り出した（Oguntoye [2020]）。つまり、ナイジェリアはアジアからの安価な輸入米の流入を食い止めることで、米の自給率を上げようと奮闘しているのである²⁴⁾。

では、SSAの穀物輸入は今後どうなるのだろうか。周知のとおり、日本のJICAと国際NGOのAGRAが2008年にスタートさせた「アフリカ稲作振興のための共同体

(CARD)」イニシアティブは、SSAでの米の生産量を2018年までの10年間に年1400万トンから2800万トンへ倍増させると謳い、実際に達成されたと見られている。また2019年から始まったCARDフェーズ2では、2030年までに年5600万トンへとさらに倍増させる目標が打ち出されており、AGRAのカリバタ総裁は、こうした生産拡大によって2030年までにアフリカ全体で米の輸入をゼロにできる、と声明している（『日本経済新聞』2018年10月8日付朝刊）。もしそうであれば、SSAの米の輸入量は早晩ピークアウトする（または、既にピークアウトした）、ということになるだろう。

したがって、SSAでの小麦と米の増産に関するこのような違いを念頭においた上で、「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」からの穀物輸入量の大半が小麦であり、「アジア（トルコを除く）」からの穀物輸入量の大半が米であることをふまえれば、今後は「アジア（トルコを除く）」からの穀物輸入量が徐々に減り、結果として「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」からの穀物輸入量の割合が高まることになる可能性が高い。また、小麦の輸入の大半が先進国からであり、米の輸入の大半が途上国からであることをふまえれば、途上国からの穀物輸入量が今後は徐々に減る一方で、先進国からの穀物輸入量は今後も増える可能性が高い。これが、今後のSSAの穀物輸入のメイン・シナリオであろう。

他方で、米の増産がCARDフェーズ2の想定通りに進まなければ、「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」と「アジア（トルコを除く）」の役割の拮抗はさほど変化せず、途上国からの輸入量の割合も減らない、という可能性もありえる。また、小麦の消費が想定ほどには伸びないとか、小麦よりも米への嗜好がより強まり、米の消費が想定以上に急拡大するような場合にも、こうした推移をたどる可能性がある。これを、サブ・シナリオとしておこう。とは言い、「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」の割合が減り「アジア（トルコを除く）」の割合が増えるとか、先進国からの割合が減って途上国からの割合が増える、といったことまでは、さすがに想定しにくいだろう。

おわりに

本稿を閉じる前に、これまで示してきた数値について、少し付言しておきたい。UNSD [2020a] に任意の年のデータが収録される時期は、先進国よりSSA諸国のほうが遅めであり、2018年や2019年のSSA諸国のデータは、まだ収録されていないことも少なくない。また、国によっては、欠損していた期間のデータがこれから追加収録される可能性も十分にある。したがって、本稿で示した数値は、今後まだ膨らむはずであり、これによって図表4・9・14などで示した順位も、量が近接しているケースを中心に多少の入れ替わりがありえる。しかし、それでも、本稿が示してきた基本的な構図は、おそらく変わらないだろう。

最後に、本稿が明らかにした点を整理しつつ、SSAの穀物輸入のこれまでと今後について、供給側も含める形で、グローバルな視野から述べておこう。

第一に、SSAは長年に渡って穀物輸入量を増やし続

けているが、これを主に「米国や西欧」などからの「小麦」の輸入だと考えるのは、不正確である。まず、データで確認できる1961年以降において、SSAによる小麦と米の輸入量にさほどの差はなく、しかも近年になればなるほど、この双方の輸入量はほぼ同量となっている。また、SSAの穀物輸入量は、先進国よりも途上国からのほうが多い。さらに、小麦に限って言えば、確かにかつては米国や西欧などの伝統的な生産・輸出大国からが多かったが、いまや旧ソ連や東欧の国々からのほうが多い。

しかも、小麦は世界的に見て在庫水準が高く、米国では生産量が減少しているほか、豪州は地理的に近いインドネシアやフィリピンなどのアジア地域への輸出を増やしているため、今後、SSAが小麦の輸入相手として、旧ソ連や東欧の国々（特にロシア）への依存をさらに強めていく可能性は十分にありう。

なお、SSAでは1980年代に欧米からの援助によって小麦の輸入量が増えたことで、伝統的主食が変わってしまった、とする言説がある。しかし、図表2から確認できるように、1980年代において、SSAの小麦の純輸入量は米のそれよりも少なく、1980～2018年の累計で見ても、小麦の純輸入量が4億583万トン（48.1%）であるのに対して、米の純輸入量は3億9536万トン（46.8%）と、ほぼ同量である。また、SSAではもともと小麦よりも米の生産量のほうが多く、しかも米の生産量は激増しているのだから、生産量に純輸入量を加えた消費量で言えば、SSAでは小麦よりも米のほうがポピュラーであるというのが、現実である²⁵⁾。

第二に、SSAでの米の生産増が順調に進めば、SSAの穀物自給率は今後、反転上昇する可能性がある（または、既にそのフェーズに入っている可能性もある）。この穀物自給率の今後をここで予想することはできないが、SSAの人々による米への嗜好によって左右されることに留意したい。SSAにとって望ましいのは、米の生産増が順調に進むことで、穀物輸入の外貨を節約しつつ、農業発展を基礎とした経済発展を進めることである。逆に米の生産増が順調に進まない場合、中国やインドなどへの資源輸出で得られた外貨によって、小麦のみならず米も世界からさらに買い付けを増やす事態もありうる。

第三に、SSAで米の増産が進み自給が可能になれば、タイ、インド、ベトナム、パキスタンなどにとっては、SSAという米の一大輸出市場が縮小することになるので、その輸出余力を他地域に振り向けるか（人口増の続く中東地域が有望だろう）、さもなくば「減反」を迫られることにさえなりかねない。後者については、人口増の続くインドやパキスタンではまだ想定しづらいが、少子化の続くタイやベトナムでは、荒唐無稽とは言えない²⁶⁾。また、SSAで米の増産が進めば、かつてインドやベトナムが経験してきたように、SSAもまた米の純輸入地域から純輸出地域に転じる可能性さえ、無いとは言えない。それでもSSAの小麦の輸入増は止まらない以上、SSAの穀物輸入に占める小麦の割合は、かつて高かったというよりも、実はこれから高くなっていくと見るべきだろう。同様に、SSAの穀物輸入に占める先進国からの割合も、かつて高かったというよりも、むしろこれから高くなっていくと見るべきであろう。

本稿では、小麦と米というSSAの二大輸入穀物が、どこからどれだけ輸入されているのかを時系列で分析することで、その実態と論理を明らかにし、また二大輸入穀物を生産力ベースでトータルに見ることで、誰がSSAを養っているのかを解明した。SSAにおける穀物消費の全体像は、その輸出入とりわけ純輸入と、生産の動向（e.g. 妹尾 [2017] [2020]）を穀物毎に合わせることで、的確に掴めるはずである。別稿を期したい。

補遺

異様な値を示しているデータとその補正は、以下の通りである。

(1) ナイジェリアがイギリスから、小麦本体を、2006年に3,489,055,565kg（＝348万9055.565トン）輸入したという値。これを同年のイギリスからの輸出データで見ると、ナイジェリアへの小麦本体の輸出量は0となっており、この前後2年の2004～08年でも輸出量は計12000トン余りしかない。そこで、この348万9055.565トンという輸入量は明らかに過大と判断し、この1/100の34890.55565トンの輸入量だったものとしてデータを補正した。

(2) ナイジェリアがベルギーから、小麦本体を、2007年に2,069,516,047kg（＝206万9516.047トン）輸入したという値。これを同年のベルギーからの輸出データで見ると、ナイジェリアへの小麦本体の輸出量は0であり、この前後2年の2005～09年でも輸出量は0である。そこで、この206万9516.047トンという輸入量は明らかに過大と判断し、この1/100の20695.16047トンの輸入量だったものとしてデータを補正した。

(3) ナイジェリアがベリーズから、小麦本体を、2008年に918,227,997kg（＝91万8227.997トン）、2009年に683,453,979kg（＝68万3453.979トン）、2011年に222,088,695kg（＝22万2088.695トン）輸入したという値。これらをベリーズからの輸出データで見ると、これらの前後2年も含めた2006～13年において、同国は世界のいかなる国に対しても小麦本体の輸出実績がない。そこで、この輸入量は虚偽の可能性が高いと判断し、ベリーズからの輸入量がなかったものとしてデータを補正した。

(4) 2000年代のナイジェリアの小麦本体の輸入データでは、他にも注意を要するものがある。同国がアメリカから、小麦本体を、2006年に8,850,751,890kg（＝885万751.890トン）、2007年に7,268,920,392kg（＝726万8920.392トン）輸入したという値。この2000年代後半のアメリカからの輸出データを見ると、ナイジェリアへの小麦本体の輸出量は年に236万～314万トンであり、726万～885万トンという輸入量は過大な可能性が高い。だが、2000年代の10年間の累計で見ると、ナイジェリアのアメリカからの小麦本体の輸入量と、アメリカのナイジェリアへの小麦本体の輸出量には、さほど大きな開きはない。

実は、UNSD [2020a] では、ナイジェリアの輸入データは、あらゆる商品で2004～05年分が欠損している。2006年と2007年のアメリカからの小麦本体の輸入量についても事実を反映していない可能性が高いと思われるが、これは実際にはこの前後年（特に2005年以前）にあった

輸入量が、2006年と2007年に集中的に記載されたためではないか、つまり期ズレの問題ではないか、と考えることも可能かもしれない。そこで、この2006年と2007年のアメリカからの小麦本体の輸入量については、データを補正しなかった。ただし、2000年代後半のナイジェリアの小麦の輸入量が、2000年代前半や2010年代前半と比較して大きく膨れ上がっていることには注意を要する。

(5) スーダンがロシアから、小麦本体を、2016年に5,729,074,686kg (= 572万9074.686トン)、2018年に4,586,453,102kg (= 458万6453.102トン) 輸入したという値。これをロシアからの輸出データで見ると、スーダンへの小麦本体の輸出量は、2012年21万トン、2013年34万トン、2014年87万トン、2015年34万トン、2016年86万トン、2017年145万トン、2018年215万トンとなっているので、2010年代後半にロシアからの輸入量が増えたとは考えられるものの、2016年と2018年の輸入量は過大なように思われる。またスーダンのロシアからの小麦本体の輸入量は、2012~18年で計1200万トンであるのに対して、ロシアのスーダンへの小麦本体の輸出量は、2012~18年で計622万トンであり、相当の開きがある。そこで、2016年と2018年の輸入量を、それぞれ1/2の2864537.343トン、2293226.551トンだったものとしてデータを補正した(これにより、スーダンのロシアからの小麦本体の輸入量は2012~18年で計684万トンとなり、また2016年と2018年のスーダンの小麦本体の総輸入量も、前後年と比較して妥当な値となる)。

(6) モザンビークがロシアから、小麦本体を、2014年に5,746,630,033 kg (= 574万6630.033トン) 輸入したという値。これを同年のロシアからの輸出データで見ると、モザンビークへの小麦本体の輸出量は16万トンである。また、同年のみならずこの前後2年の2012~2016年でも、輸出量は年平均で19万トンである。そこで、この574万6630.033トンという輸入量は明らかに過大と判断し、この1/100の57466.30033トンの輸入量だったものとしてデータを補正した(これにより、同年のロシアからの小麦本体の輸入単価が自然な値となり、また同年のモザンビークの小麦本体の総輸入量も、前後年と比較して妥当な値となる)。

(7) ナイジェリアがシリアから、精米を、2000年に1,704,581,200kg (= 170万4581.200トン) 輸入したという値。これについては、同年のシリアからの輸出データで見ることができないため(シリアの輸出データを得られるのは2001年から)、これだけでは過大とは断定しにくい。しかし、シリアの米の生産量は長年、百数十トン程度であった上に、1997年以降は生産量が統計上存在しないこと(FAO [2020])、途上国のシリアがナイジェリアにこれだけの量の援助を行うとは考えにくいこと、この170万トン余の値によって同年のナイジェリアの米の輸入量が史上最大となっていること、輸入単価が異常に安いことの4点から、この170万4581.200トンという輸入量は過大な可能性が極めて高いと判断し、この1/100の17045.81200トンの輸入量だったものとしてデータを補正した。

(8) ナイジェリアがイタリアから、精米を、2000年に405,476,076 kg (= 40万5476.076トン) 輸入したという値。

これを同年のイタリアからの輸出データで見ると、ナイジェリアへの精米の輸出量は0となっている。また、この前後2年の1998~2002年でも、輸出量は2002年の75kgしかない。そこで、この40万5476.076トンという輸入量は明らかに過大と判断し、この1/100の4054.76076トンの輸入量だったものとしてデータを補正した。

(9) モザンビークがタイから、精米を、2013年に6,019,172,232kg (= 601万9172.232トン)、2014年に1,656,728,453kg (= 165万6728.453トン) 輸入したという値。これをタイからの輸出データで見ると、モザンビークへの精米の輸出量は2013年に22万トン、2014年に38万トンであり、これらの前後2年の2011~16年でも輸出量は年平均で27万トンである。そこで、この2年の輸入量は明らかに過大と判断し、それぞれ1/10の601917.2232トン、165672.8453トンの輸入量だったものとしてデータを補正した(これにより、輸入単価も自然な値となる)。

注

- 1) ここでの数値は、すぐ後に述べる係数を用いて換算した量に基づいている。また、本稿では、自給率を生産量と純輸入量から求めており、在庫変動については考慮していない。
- 2) 1990年代だけは、米よりもメイズの輸入量が多い。これは1992年の大干ばつの際に、この地域で最も多く生産されている穀物であるメイズの生産量が激減したためである。
- 3) SSAのメイズの輸出については、紙幅の都合上、本稿では立ち入らないが、妹尾 [2017: 285] および妹尾 [2020: 305] から推察できるように、近年は南アからの輸出が圧倒的に多く、これにザンビアやウガンダが続いている(FAO [2020])。また輸出先としては、これら諸国の近隣の南部・東アフリカ諸国向けが多い(UNSD [2020a])。
- 4) これは、商品コードをHSとする場合である。これに対して商品コードをSITCとする場合は、UNSD [2020b] によれば、SSA諸国でも1980年代以前のデータを得られる国が多くあることになっている。だが実際には、国や年次によっては、1980年代以前のデータを得られないことが多い。のみならず、1990年代以降では、HSではデータを得られるのにSITCではデータを得られなくなる、ということが多い。このように、商品コードをSITCとすると、データを得ることがHSよりも難しくなるので、ここではSITCについては検討の俎上に載せないこととする。
- 5) ただし、輸入側から見る場合には、各輸入国側において、パキスタンやベトナムからの輸入実態が1990年代からきちんと記録されている。
- 6) 二国間の貿易額(貿易量ではない)の輸入側と輸出側の不整合について検討した坂本によれば、途上国と比べ先進国の報告データのほうが信頼できるとは言えない、という(坂本 [2003: 43])。
- 7) 具体的には、本稿では以下の6つのHSコードの商品を取り扱う。小麦本体=1001、小麦粉=1101、粳米=

- 100610, 玄米=100620, 精米=100630, 砕米=100640。なお、小麦本体の1001は、HS 6桁ではより細分化されているが、本稿では6桁で区別する必要がないため、HS 4桁のデータを扱った。
- 8) このうちマリとマダガスカルは、より輸入量の多いはずのコンゴ民主共和国とソマリアのデータが得られないために、代わりに含めた国である。
- 9) トルコの1995～2018年の小麦粉の純輸出量3483万トン（純輸入量がマイナスなので、純輸出量である）は、小麦本体に換算すると4838万トンに相当するので、小麦本体の純輸入量5142万トンの実に94.1%を製粉して輸出に回している、と見なせる。
- 10) ブラジルが、低自給率にもかかわらず、SSAに小麦を一定量輸出している理由は判然としない。ただ、もし近隣諸国での生産分がブラジルから輸出されているのであれば、輸出量はもっと安定的なはずなので、この輸出は在庫整理的な性質を帯びているのかもしれない。
- 11) 図表4の③期に、アメリカからの輸入量が大きく跳ね上がっていることについては、補遺の(4)を参照のこと。
- 12) アメリカでは、この間に小麦の生産面積が30%も減少した。そもそもアメリカの小麦の生産面積は1981年の3264万haが最高で、2017年には1520万haとピーク時の半分以下にまで減っている（FAO [2020]）。これは、過去100年で最低水準とも言われている。
- 13) ロシアでは、米国などと異なり小麦の貯蔵能力に限りがあるため、増産した小麦をすぐに輸送（輸出）しなければならず、価格も米国産より安い。この低価格がSSAにとって好都合なのは、言うまでもない。
- 14) このうちトーゴ、エチオピア、ウガンダは、より輸入量の多いはずのリベリア、ソマリア、コンゴ民主共和国のデータが得られないために、代わりに含めた国である。
- 15) 中国は、当該期間において、インドネシアとナイジェリアに次いで、世界3位の米輸入国である（FAO [2020]）。
- 16) 後に見るように、中国から輸入している国から考えて、この量の相当程度は商業ベースの取引によるものではなく援助物資ではないか、と推察できる。
- 17) 2010～18年の累計輸入量で見ると、多い順に、中国、イラン、サウジアラビア、インドネシア、フィリピンとなっている（FAO [2020]）。
- 18) インド米は、タイ米やベトナム米よりも価格が安いと言われている。当然、これはSSA市場では強みとなる。
- 19) 1960年代から80年代前半にかけて、この3国ではインド系住民の受難が続いた。例えば、ケニアではアフリカ人優遇政策が進められ、ウガンダではインド人追放政策が実行され、タンザニアでもインド人が住んでいた借家が多く没収されるなどした（富永・宇佐美 [2000: 90-96]）。
- 20) エチオピアは、1962年の中印国境紛争で、インドの主張を支持したSSAで数少ない国の一つであった（近藤 [2012: 182-183]）。
- 21) ギニアは、SSAで最初に中国と国交を結んだ国であり、その初代大統領トゥーレは、1960年にアフリカで最初に中国を訪問した国家指導者とされている（段 [2014: 97, 105]）。またタンザニアは、タンザン鉄道に象徴されるように、長年にわたる中国との深い友好協力関係がある。
- 22) 図表14を作成するには、単に小麦の図表4と米の図表9の数値を合算すれば良いわけではない。というのも、2つの図表の一方にしか出て来ない国でも、実際にはその国から小麦と米の双方を輸入していることが多いので、少なくとも一方の図表に出てくるすべての国に関して、小麦と米の双方の輸入量をカウントしなければならないからである。また、図表4と図表9の双方で顔を出さないが、小麦と米の双方の輸入量を足すと図表14に登場しうる量となる国があるので、こうした国も漏れなく扱う必要がある（28位のオランダがこれに該当する）。他方で、図表9でのみ顔を出すタンザニアについては、期間合計で64万トンと少ないため、ここでは除外した。
- 23) したがって、ここで言う先進国からの輸入量とは、「北米・南米・豪州・欧州・旧ソ連」からの輸入量に、「日本」からの輸入量を加え、「南米」からの輸入量を差し引いたもののことである。
- 24) ナイジェリアは、かねてより米の輸入代替に向けた取り組みを進めており、その一環として、2013年には米の関税率を70%に引き上げていた。これに対してベナンは、2014年に米の関税率を35%から5%に引き下げており（Orjinmo [2019], The Punch [2020]）、これがベナン経由での米の密輸を活発化させたと考えられる。2019年の陸路貿易の遮断は、こうした一連の政策展開の中で理解されるべきものである。なお、陸路国境の封鎖は2020年12月によりやく解除され、陸路貿易も再開されたものの、米の輸入禁止は続いている（Ojo [2020]）。
- 25) SSAで小麦の消費量が米のそれを上回ったことは、データで確認できる1961年以降において、一度もない（FAO [2020]）。この点に関連して、人間の味覚上、小麦よりも米のほうが好まれるのであり、したがって人類の主穀は小麦よりも米になる、と述べていた中尾の指摘を想起しておきたい（中尾 [1966: 139-140]）。
- 26) 本稿執筆時点では、タイの米の生産面積は、2012年の1196万haが史上最高で、2018年には1041万haに減少しており、生産量も2011年の3810万トンのピークから、2018年には3219万トンに減少している。同様に、ベトナムでの米の生産面積は、2013年の790万haが史上最高で、2018年には757万haとなっており、生産量も2015年の4509万トンがピークで、2018年には4404万トンとなっている（FAO [2020]）。

文献

- 段瑞聡 (2014) 「1950～60年代中国とアフリカ関係における台湾要因：『二つの中国』と中国代表権問題を中心に」『慶應義塾大学日吉紀要・中国研究』(7)：135-164。
FAO (2020) *FAOSTAT*, <<http://www.fao.org/faostat/>>

- en/#home>, 2020年8月6日～10月18日アクセス.
- 近藤則夫 (2012) 「インドとアフリカの国際関係の展開」
近藤則夫編『現代インドの国際関係：メジャー・パワー
への模索』日本貿易振興機構アジア経済研究所,
179-224.
- 中尾佐助 (1966) 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店.
- 西澤成世 (2019) 「連邦政府、コメなど農業振興重視も
密輸対策などに課題 (ナイジェリア)」『ビジネス短信』
2019年4月24日付, <<https://www.jetro.go.jp/biznews/2019/04/1aba04c6ef1c2ef9.html>>, 2019年9月15日
アクセス.
- Oguntoye, Philip (2020) "Border Closure: Impact on
the Nigerian Economy", *Business Day*, Jan. 20, 2020,
<<https://businessday.ng/opinion/article/border-closure-impact-on-the-nigerian-economy/>>, 2020年9
月14日アクセス.
- Ojo, Jide (2020) "Border Reopening: Imperative of
Tackling Illegal Entry Routes", *The Punch*, Dec. 23,
2020, <<https://punchng.com/border-reopening-imperative-of-tackling-illegal-entry-routes/>>, 2021年1
月18日アクセス.
- Orjinmo, Nduka (2019) "Nigeria's Border Crisis
Fuelled by Rice", *BBC News*, Oct. 31, 2019, <<https://www.bbc.com/news/world-africa-50223045>>, 2020年
9月14日アクセス.
- 坂本英陽 (2003) 「二国間貿易におけるデータの不整合
と調整」野田容助編『貿易指数の作成と応用：東アジ
ア諸国・地域を中心として』日本貿易振興会アジア経
済研究所, 43-58.
- 妹尾裕彦 (2017) 「サブサハラ・アフリカにおける穀物
生産構造と単収の変動, 1961-2014: 穀物・国家・大
陸間比較」『千葉大学教育学部研究紀要』65: 279-
294.
- (2020) 「サブサハラ・アフリカにおける単収
増を主とした穀物増産とその模倣の可能性: 南ア, マ
ダガスカル, ザンビア, エチオピアの比較検討」『千
葉大学教育学部研究紀要』68: 301-315.
- The Punch (2020) "Border Closure Should be
Reviewed", *The Punch*, Aug. 17, 2020. <<https://punchng.com/border-closure-should-be-reviewed/>>,
2020年9月14日アクセス.
- 富永智津子・宇佐美久美子 (2000) 「東アフリカのイン
ド人: 歴史と現状」古賀正則・内藤雅雄・浜口恒夫編
『移民から市民へ: 世界のインド系コミュニティ』東
京大学出版会, 72-113.
- UNSD (The United Nations Statistics Division) (2020a)
UN Comtrade Database, <<https://comtrade.un.org/>>,
2020年8月11日～10月18日アクセス.
- UNSD (The United Nations Statistics Division) (2020b)
Data Availability, <<https://comtrade.un.org/api/refs/da/view?fmt=csv>>, 2020年8月12日アクセス.
- * 本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究 (C) 「穀物と
イモからみるアフリカ諸国の食料生産・消費をめぐる
構造変動」(研究課題番号: 17K02000, 研究代表者:
妹尾裕彦) による研究成果の一部である。